

はじめに―一本特集の臨床社会学プロジェクトにおける位置づけ―

臨床社会学は社会学など関連分野において必ずしも十分に認知された名称ではない。しかし、臨床実践が医学、心理学、看護学、福祉学などの個別分野の研究だけでは十全に完結しえない現実があり、社会的な文脈を無視して成り立たないことも看過できず、そうした側面に配慮して、QOL研究（生活の質）、当事者研究、被害者学（トラウマ研究）などという諸学融合的な関心が高まっていることも事実である。臨床社会学プロジェクトはこうした動向を踏まえ、相互作用、コミュニケーション、関係性の研究という社会学の方法を駆使し、臨床事例の援助実践から社会資源としての制度デザインまでを連続的に包括する理論枠組みモデルを創造することを目的としている。諸学融合的な視点をもともと有している社会的な視点を活かし、対人援助実践とヒューマンサービスと社会の関わりを主題とするものとして、私たちは臨床社会学を構想している。とりあえずは、その対人援助とヒューマンサービスの多様な実践を記述することとしている。

臨床社会学プロジェクトは、臨床実践を関係性の病理の視点から反省的にとらえる再帰的实践でもあり、個人の適応を目標にする「医療モデル」に臨床を還元することや、マクロな制度批判に終わるだけの「社会モデル」へと臨床を拡散させることのない、新しい創発性を有した社会的実践として臨床を位置づけるという仮説のもとに、それぞれの考究をすすめている。それを具体的な臨床実践領域において検証することを重視している。臨床社会学においては、＜臨床＞が＜臨場＞という意味において機能することを新しい援助ニーズが示していることを論証する。そうした検証の領域として、家庭内暴力、アディクション、ひきこもり・不登校という社会病理学的な対象を想定している。あるいは、障害のある子どもの家族の研究、野宿者支援と自立の課題の抽出なども課題としている。また、回復と再生の＜場＞の再構築としての臨床実践が機能する過程と構造を分析し、それを可能にする司法をはじめとした制度と政策（治療的司法と修復的司法による臨床援助とHarm

Reduction政策の導入の検討)、さらにそれを支える社会倫理的な理念(「善き生」well-beingをめぐる社会統治の課題の位置づけの明確化など)の構成について総合的に扱う課題も設定している。今回の特集として編まれた主題は、そのなかでも比較的新しい課題である多文化社会とコミュニケーションの問題である。

こうした過程を「社会臨床実践」として位置づけ、すでに連携している援助機関やNPO団体のモデル的实践を調査し、分析対象とする。既存の社会が有するコミュニケーションモードの修正による積極的アシスト(positive assist)が必要な被援助者とそのニーズを示すものとして、介入的臨床の理念と技法、支援方法、社会制度デザインなどを包含した理論モデル化をしようとする研究の一環として今回の特集の課題があると位置づけている。

さらに本プロジェクトで重視しているテーマは、「心理学(心理主義)化」に傾斜しがちな対人援助とヒューマンサービスに社会的な視点を加味することである。こうした傾向に対して社会構築主義的な研究を対置してそれ自体を批判的に分析することは有意義である。しかし本プロジェクトはそのことを踏まえたうえで、要援助性と臨床的諸実践の機能分析をおこない、「社会の心理学化」を建設的に脱構築するための臨床社会学の理論と実践モデルを構築し、臨床社会学の科学的基礎づけ作業をおこなうことも課題としている。

言葉をかえれば、臨床社会学プロジェクトは社会と人間科学の(心理)臨床化がすすむ状況を前にして、それをたんに批判するだけではなく、現実的な社会臨床実践学の構築をめざすことをとおして心理臨床化の脱構築作業を展開しようとしている。コミュニケーションと行動の機能分析という手法を使いながら社会環境の障害性として再構成し、それを縮減する対人援助とヒューマンサービスの実践分析という共通の基盤を展開しようする計画でもある。ことさらに心理臨床化しない援助の再構造化を提示し、社会環境を問題視するミクロな援助技法を形成することを目的としているともいえる。こうした問題意識をもとにした臨床社会学の応用分野としての多文化社会と対人援助・ヒューマンサービスの事例としてこの特集を位置づけている。

臨床社会学プロジェクト代表
立命館大学産業社会学部・同大学院応用人間科学研究科教授
中村 正